離島・北部３村における
地域包括ケアシステム構築支援モデル事業

ー 大宜味村の事例 ー

大宜味村住民福祉課
福祉係長　野原　侑也

大宜味村の概要

長寿の里

芭蕉布の里

シークヮーサーの里

ぶながやの里

■人口　3,042人（令和5年3月31日現在）

■65歳以上人口　1,200人
　65歳-74歳（前期高齢者）　632人
　75歳以上　（後期高齢者）　568人

■高齢化率　39.4%

■認定者数：　254人（第1号被保険者数）

■認定率　21.2%

■調整済認定率　19.1%

■医療資源
診療所：１
歯科診療所：１
薬局：１

■介護資源
通所介護：１
訪問介護：１
特別養護老人ホーム：１
小規模多機能型居宅介護：１
認知症対応型ＧＨ：１
有料老人ホーム：１
居宅介護支援事業所：１

■大宜味村の特徴

・「長寿の里」「芭蕉布の里」「シークヮーサーの里」「ぶながやの里」をキーワードにむらづくり

・村土の約77%が森林に覆われている。

・2021年（令和3年）に国頭村、東村とともに「やんばるの森」が世界自然遺産に登録

モデル事業の流れ

1. モデル町村の募集、決定
   - 令和４年7月21日「モデル事業説明会」
   - モデル自治体の募集
   - 令和４年8月____モデル自治体の決定＝国頭村、大宜味村、伊江村

2. ヒアリング（地域の状況や担当職員の問題意識等の聞き取り）
   - 令和4年11月

3. 「村を離れた高齢者の調査」実施

4. 集計、分析

5. 調査結果を踏まえた「大宜味村における取組み」の検討

調査内容及び調査方法

1．調査内容

■大宜味村を離れた高齢者について、当時の離れた状態と離れた理由を把握し、**生活を継続することができなくなる要因を整理**（次頁に質問項目を掲載）

2．調査方法

＜対象＞

■過去3年間（2020年、2021年、2022年）に村外へ移住した高齢者

＜方法＞

■公簿を基に対象者を抽出

■役場担当者がケアマネ、民生委員に対し聞き取り等を行い把握した。

調査票の調査様式（一部項目を省略）

	1.対象となる高齢者の基礎情報			2.対象となる高齢者の心身の状況	3.対象となる高齢者の転出前のサービス等の利用状況、活動等への参加状況			4.対象となる高齢者の世帯や家族支援の状況			5.移住のきっかけ、理由、移住先				6.その他、村外の家族等の状況		7.村内で生活を継続するために必要な支援
設問	Q1-1. 性別	Q1-2. 年齢	Q1-3. 要介護度	Q2-1 心身の状況	Q3-1. 転出前に利用していたサービス	Q3-2. 介護サービス**以外の**利用状況	Q3-3. 村内の活動への参加状況	Q4-1. 移住前の世帯類型	Q4-2. 公的なサービスを除き、家族や親族等による日常生活への支援※の有無 ※日常的な買い物や、調理、掃除、洗濯、手続き等の支援、薬の管理、金銭の管理等を想定	Q4-3. 公的なサービスを除き、家族や親族等による身体介護※の有無 ※移乗・移動や、食事、排泄、入浴、更衣・整容等を想定	Q5-1. 移住のきっかけとなった人・キーパーソン	Q5-2. 移住のきっかけ（心身の状態） ※以下のうち、最も当てはまるもの１つをご回答ください。難しい場合は「その他」をご回答いただき、自由回答で内容を教えてください。	Q5-3. 移住の主な理由	Q5-4. 移住先での住まい方	Q6-1. 移住前の家族、親族の状況	Q6-2. 現在の住民票の状況	Q7. どのような支援の充実があれば、より長い期間、村内にとどまっていられたのか
選択肢	1.男性 2.女性	1.40歳～64歳 2.65歳～74歳 3.75歳～84歳 4.85歳以上	1.事業対象者(チェックリスト) 2.要支援1 3.要支援2 4.要介護1 5.要介護2 6.要介護3 7.要介護4 8.要介護5 9.申請中 10.未認定（要支援、要介護レベル） 11.自立 12.不明	1.認知症の症状がある 2.「1」を除く精神疾患に類する症状がある 3.医療的ケアが必要 4.左記に該当するものはない 5.不明	1.訪問介護 2.通所介護 3.通所リハ 4.訪問リハ 5.ショートステイ 6.グループホーム 7.特別養護老人ホーム 8.有料老人ホーム 9.不明 10. サービス利用なし	1.配食サービス 2.買い物支援 3.外出支援 4.軽度生活支援 5.その他（　） →AS列に記入 6.不明 7.利用なし	1.ミニデイ 2.くがにサロン 3.サークル活動 4.その他（　） →AZ列に記入 5.不明 6.利用なし	1.単身 2.夫婦のみ 3.その他同居世帯 4.不明	1.あり 2.なし 3.不明	1.あり 2.なし 3.不明	1.本人 2.同居の家族、親族 3.別居の家族、親族 4.その他 5.不明	1.虚弱 2.病気 3.怪我 4.認知症 5.救急搬送 6.その他 7.不明	1.該当なし 2.生活不安が大きいから 3.居住環境が不便だから 4.村の介護サービスでは生活継続が難しいから 5.村外での医療サービスが必要だから 6.本人が介護者の負担軽減を望むから 7.費用負担が重いから 8.家族が望むから 9.その他の意向 10.不明	1.家族等と同居 2.施設入所 3.長期入院 4.その他 5.不明	1.村内に家族、親族がいた 2.県内（村外）に家族、親族がいた 3.県外に家族、親族がいた 4.居所問わずいない 5.不明	1.異動している 2.異動していない 3.不明	1.訪問を中心としたサービスの提供 2.通いを中心としたサービスの提供 3.泊まりを中心としたサービスの提供 4.生活支援の提供 5.医療 6.その他　⇒具体的に57行目に記入 7.サービスや支援の充実があっても難しい
1																	
2																	
3																	
4																	
5																	
6																	
7																	
8																	
9																	
10																	
11																	
12																	
13																	
14																	
15																	
16																	
17																	
18																	
19																	
20																	
21																	
22																	
23																	
24																	
25																	
26																	
27																	
28																	
29																	
30																	

＜**調査項目**＞

- ◆ 年齢、性別、要介護度
- ◆ 世帯類型、心身の状況
- ◆ 認知症状の有無、医療的ケアの状況
- ◆ 利用しているサービス
- ◆ 移住のきっかけとなった人、移住のきっかけ（心身の状態）、移住の主な理由
- ◆ どのようなサービスがあれば村内に残れたか　等

調査結果の概要

- 3年間で74名の高齢者が大宜味村を離れており、そのうち34名（約46%）は前期高齢者で、ほぼ「自立」の状態だった。前期高齢者で自立の方の転出理由としては、「仕事関係」、「家族と暮らすため」がほとんどだった。
- また、その人たちは転入してから３年以内に村を離れたケースが多かった。

３年間で村を離れた高齢者の人数

	令和2年（2020年）	令和3年（2021年）	令和4年（2022年）	合計
転出者数	２７名	２２名	２５名	７４名

介護度	R2	R3	R4	計
自立	１０	7	１０	２７
要支援１	0	0	0	0
要支援２	0	0	2	2
要介護１	0	4	1	5
要介護２	2	0	3	5
要介護３	1	5	0	6
要介護４	6	3	2	１１
要介護５	3	0	2	5
未認定	0	1	1	2
不明	5	2	4	１１

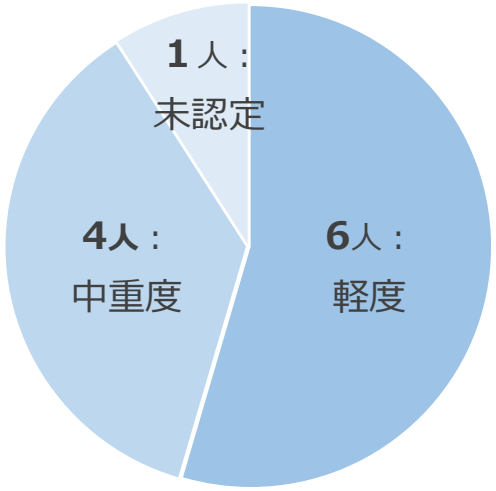
年齢	R２	R３	R４	計
65歳～69歳	4	5	8	１７
70歳～74歳	4	5	8	１７
75歳～79歳	4	5	2	１１
80歳～84歳	6	1	4	１１
85歳～89歳	6	4	1	１１
90歳以上	3	2	2	7

転入前自治体	R２	R３	R４	計
村内	3	6	0	9
村外（県内）	２４	１４	２０	５８
村外（県外）	0	2	5	7

調査結果の概要 －令和４年（2022年）－

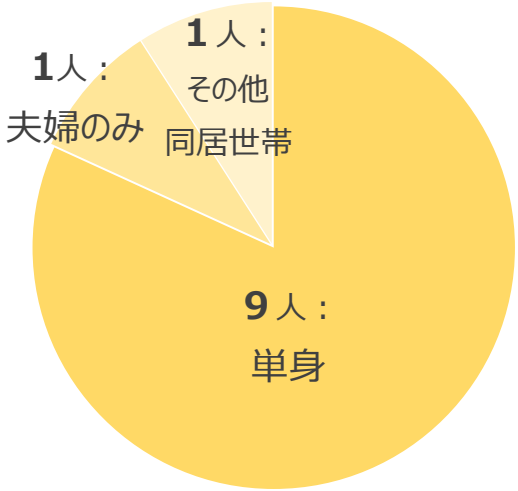
- ３年分の調査を行ったが、結果は大きく変わるものではなかったことから、令和４年（2022年）のデータを抽出し整理した。
- 分析については、要支援1以上（未認定含む）を対象に行った。

【要介護度】

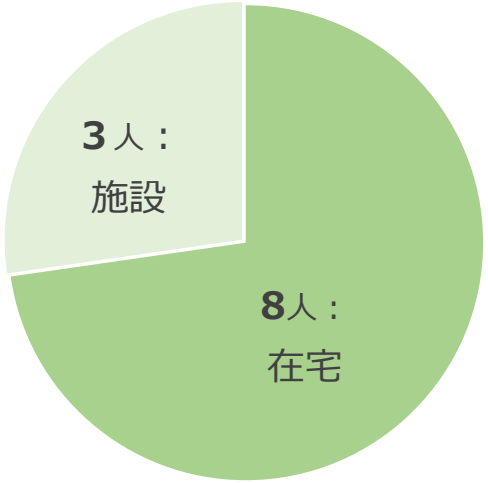


※軽度者＝要支援１～要介護２、中重度者：要介護３～５

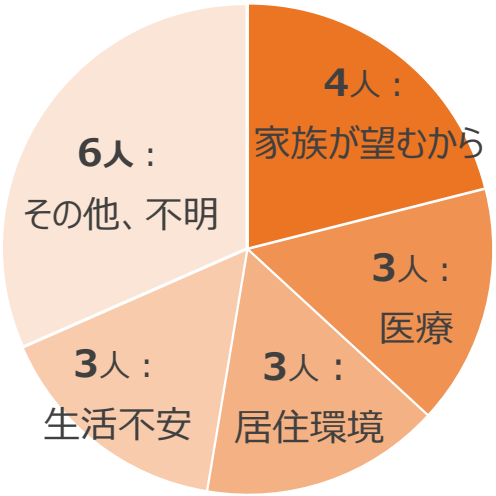
【世帯類型】



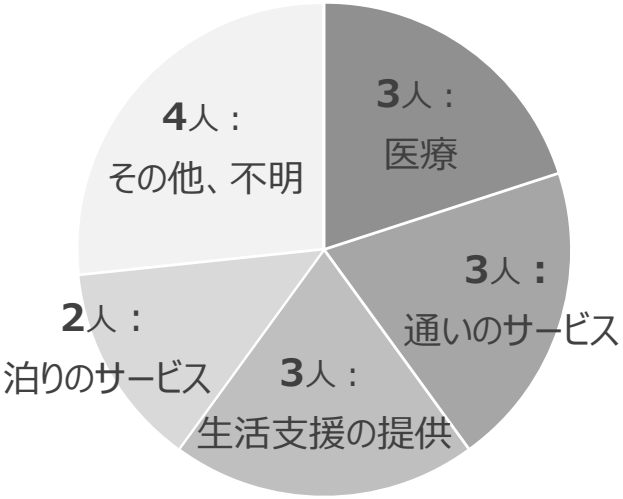
【居住形態】



【村を離れるきっかけ】※複数回答



【これがあれば･･･残れていたかも】※複数回答



調査結果の概要 －令和４年（2022年）－

転出した高齢者の状況（軽度･未認定）

No.	要介護度	性別	年齢	世帯類型	その他の情報
２０	要支援２	男性	７７	単身	山中にある陶芸工房で生活。水道・ガスは通っておらず、トイレ・浴室もない環境で暮らしていた。令和3年12月に単独事故を起こして入院。退院後は、住環境の悪さから、施設入所となった。村内の有料老人ホームも検討したが、空きがなかった。（県内出身者）
２１	要支援２	男性	７９	単身	令和2年に熱中症のため、与那原町の病院に入院。大宜味村では独居生活のため、西原町の姉宅で生活していた。令和4年に住民票を同町に移したが、昨年12月から本村で生活をしている。（村出身者。県内から転入）
２４	要介護１	女性	８４	単身	認知症状があり独居での生活が厳しく、転出１か月前には子宅へ引っ越す。子の介護負担大きく施設へ入所となった。（村出身者。県内から転入）
２３	要介護２	男性	８３	夫婦	パーキンソン病を患っており、名護まで1時間をかけて通っていた。村内でリハビリができるデイサービスがあれば、村内に住み続けられた可能性あり。転出後は妻と一緒に息子宅に。（県内出身者）
１８	要介護２	男性	８５	単身	施設入所者。アルコール依存症があり、施設付近にコンビニがあるため、お酒の購入が難しい隣村の施設に入所。（村出身者。県内から転入）
１７	要介護２	女性	７４	その他 同居世帯	（村出身者。県内から転入）
１５	未認定	男性	７２	単身	転出直前に脳梗塞を煩い、入院・手術。リハビリ入院が必要な状態となる。子が県外在住であり、入院手続き等で頻繁に来れないため、子宅近くの病院へリハビリ転院することとなる。（県外出身）

転出した高齢者の状況（中重度）

No.	要介護度	性別	年齢	世帯類型	その他の情報
２５	要介護４	女性	９１	単身	平成29年より村内の認知症対応型グループホームに入所していた。娘がキーパーソンだったが、子が出産のため東京との往来があり対応が難しくなった。孫がケアマネをしている施設に空きが出たタイミングで転出。令和5年に施設から本村に戻ってきている。（村出身者。県内から転入）
２２	要介護４	男性	７２	単身	令和元年以降転入・転出を繰り返す。入居施設（有料老人ホーム）を強制退去となった。退去後は、宮里病院の精神科病棟に3ヶ月ほど入院、新たな入居する施設が見つかったため、転出。以前から家族や女性に威圧的・暴力的で子とは疎遠。妻は精神疾患で精神科に入院している。（村出身者。県内から転入）
１６	要介護５	男性	６９	単身	施設入所者。経管栄養が必要となり、施設では対応ができないため。
１９	要介護５	女性	９９	単身	施設入所者。経管栄養が必要となり、施設では対応ができないため。

その他調査の結果概要－大宜味村の要介護認定者の状況－

要介護者数
254人
（令和5年3月末時点）

村に残っている
要介護者数
207人

村に住所を置いたまま移動している人
30人

村外の特養などに入所している人
17人

大宜味村の介護保険料に反映される
村外にいる要介護者数
47人

給付データより作成（沖縄県介護保険広域連合提供）

	要支援１	要支援２	要介護１	要介護２	要介護３	要介護４	要介護５	合計
特養	0	0	0	0	4	3	2	9
老健	0	0	0	2	6	4	6	１８
介護医療院	0	0	0	0	0	1	1	2
有料老人ホーム	0	0	1	3	1	2	1	8
その他	0	0	2	3	3	1	1	１０

今後の取り組み方針

調査から見えてきたこと

- 村を離れる理由は、「家族の希望」、「医療」、「住まい」、「生活不安」がほとんどとなっている。
- 村を離れた方の多くが、村外からの転入者、または村出身者であっても、高齢になって戻ってきたケースが多い。
- 単身世帯かつ、村内に家族、親族がいない場合が多く、村を離れる一つの要因になっている。
- 特養において、「経管栄養」になった場合、施設側で対応ができず、退所につながっている。
- 住民票を異動せずに、住まいを移している高齢者が一定数いる。

今後の方向性

- 今回の調査結果をベースに、関係者と「在宅限界点」についての意見交換や必要なサービスについて、考える機会を設ける。
- 特別養護老人ホーム及び診療所の医師と意見」交換の機会を設けるとともに、在宅医療・連携推進事業を通して情報交換を行う。
- 高齢者の住まい確保について、村営住宅が一定の役割を担ってはいるが、老朽化した家に住む高齢者も増えてきていることから、高齢者の住まい問題に取り組んでいる先進自治体の情報収集に努める。
- 医療や介護サービスなど、今後ますます不足する社会資源をどのように確保できるか、先進自治体の情報収集などに努める。（補助金制度など）

感想

- 窓口業務や高齢者との関わりの中で把握する感覚的な現状認識はもっていたが、本事業に取り組んだことで、高齢者の実態や課題を数字として把握することができた。
- 集計・分析結果に対して、三菱UFJリサーチ＆コンサルティングや沖縄県介護保険広域連合から助言を得られたことで、より課題が鮮明化され、課題に対してのアプローチ方法などの知見を深めることができた。

ご静聴ありがとうございました。

大宜味村PRキャラクター「おおぎみシーちゃん」